

日本とアラブに橋をかけるタイヤラさん

文●木立玲子
Texte de REIKO KIDACHI

「メキシコ人はね、ああ、アメリカは近く神は遠いと言って嘆くのよ」と話していたのはパリ在住のメキシコ人舞踊家のバオラであった。恐ろしくリアリティに満ちた言葉だと思った。歌手ジャック・ブレル（注1）の終の住処として知られる大西洋の島、仏領ポリネシア・マルキーズ島は、あまりに他の島から離れているため、島の住民は自分たちに一番近いのは神だと思っている、と独仏共同出資文化専門局アルテド・ド・キユメンタリーが伝えていた。これもなかなかリアリティに富んでいる。今年はいんシユタインの相対性理論発表100周年に当たり、フランスでもさまざまな記念イベントが開催されているが、仏人作家マルセル・ブルースト（1871-1922）の古典『失われた時を求めて』は、相対性理論にヒントを得て書かれた当時の大前衛小説なんだぞうだ。そういうえば、ドイツ人映画監督ヴィム・ベンダースの作品に『時の翼にのって』フェラウエイ・ソー・クロース（93年作品、仏題は『シ・ロアン・シ・プロッシュ』）へかくも遠く、かくも近く』というのがあった。遠いと思ったら近く、近いと思ったら遠くて……なんだか望遠鏡のような、顕微鏡のような、ヨーヨーみたいな、人間みたいな時差蒲というわけで、前号に引き続き、遠くへ近いアラブと日本の話におつきあい願いたし。

『ル・ジャボン・エ・デザラブ（日本とアラブ人）』これはレバノン出身パリ在住の作家、ジャーナリスト、日本学者のバツサム・タイヤラさん（52歳）が、2004年にパリのメデアニス社から出版した日本のアラブ世界観検本の題名だ。副題は「17代から動乱の明治時代に至る日本人のアラブ世界観。表紙は、上杉謙信、市川団十郎の文字が見える武者絵と、モスク（イスラム寺院、棕櫚、アラビア人が描かれた絵で、中扉にはエドワード・サイードの「国家の」と規定されたすべの文化は、わたしはこのことを確信しているのであるが、主権と支配にインスピレーションを与える」（拙訳）という言葉が記されている。

日本はアラブ世界の情報を古くは中国経由で、明治以降はヨーロッパ経由で入手してきたが、『ル・ジャボン・エ・デザラブ』は、日本のアラブ情報取得およびイメージ形成のプロセスを膨大な歴史資料を駆使して立体的に検証してみせる。日本と西洋の間には広大なアラブ文化圏が広がることの意味。中東とは西洋から見ての東側であったから、日本から見たら「中東」は西に位置するのだから、西洋を極西とみれば、「中西」（ちゅうせい）でなくなくてはならないのであるが、日本は、西洋人の地理観をそのまま取り入れて現代に至るまで修正す

ることがなかったのは何故かなどなど、当たり前だと思っていたことが実は、外から見るとちっとも当たり前でないことにはっと気づく。参考資料一覧表には日本語文献のほか、英語、仏語、アラビア語文献が網羅されていて、それだけでも十分に圧倒させられるのであるが、縦糸と横糸を誠実に織り込むという作業によって、重層的な歴史的事実をいかに等身大に、わかりやすく伝えようかと努力する姿が、そこはかとなく伝わってくる。アラブと日本の両者に対する真摯な愛情がなくては到達出来ない仕事である。日本研究者は、ひらがな、漢字に精通しているという事実を自撃する機会はこれまでも幾度かあったが、タイヤラさんは会話の中であまりに自然に古文、漢文を駆使するものだから、こちらは自分の日本文化欠落度をじわじわと教えられることになる。ちよつと日本語が話せるというだけで、確に日本文化に愛情もないのにテレビに出てちやほやされ悦に入っている日本在住ガイジンタレントにはタイヤラさんの爪の垢でも煎じて飲ませたいものだ。

それにしてもタイヤラさんの本はいわゆる欧米人の日本理解とはひと味違うぞ、と思った。こんなことがあった。一般的欧米人のもの見方を象徴するようなエピソードなので紹介したい。仏国立ギメ美術館は、世界有数のアジア美術コレクシ



手前2冊はタイヤラさんが出版したアラビア語の日本語解説書

ヨンで知られるが、先日、学芸員の案内で当美術館が所有するアフガニスタン、インド、ベトナム、カンボジアの仏教美術を見る機会があった。早い話が仏像見物である。日本人にとっては珍しくもなんともないが欧米人にとっては十字架にかかったキリストに比べればやっぱり珍しい。だから、質疑応答の時間になって、同席したフランス人から、日本人なら思いもつかないような質問が出るのは十分予想されることであった。最も印象に残った質問をひとつだけあげておこう。(蓮の葉に座

る仏陀の前で「仏陀と蓮の葉は喧嘩しないのですか?」だ。なにこれも三元論で考えがちなフランス人の質問らしいと思った。現在の日本では「勝ち」「負け」という言葉が横行していて、その言葉に慣れてしまった人間にとっては耳目をひきつける質問になりえないかもしれないが、仏陀と蓮の喧嘩、という発想は、八百万の神が宿る国の人間には思いもよらない質問だという気がした。というところ、イスラム教、ユダヤ教だって一神教じゃないか、という声がかえってきた。そうである。しかし、問題はイスラム教とアラブ文化は一枚板ではないということだ。アラブ文化の中にはイスラム文化が含まれるとしても、イスラム文化の中にはイスラム文化が含まれるわけではない。なにせ、イスラム教が誕生する以前から、現在、中東と呼ばれるアラブ諸国にはエジプト文明、メソポタミア文明はじめ、さまざまな文明文化が存在していた。それは、キリスト教についても同じで、バチカンがピラミッド型の巨大権力機構を作るプロセスに応じて、それまでヨーロッパに存在していた民間宗教(ケルトの宗教などその典型である)は異教の名で激しく排除されていった。そもそもバチカンが認めるキリスト教しかこの世に存在していないかつたら、ダン・ブラウンだって「ダヴィンチ・コード」を書けなかったはずである。力によって無理矢理排除された歴史・文化の断片の多くは、日常生活の中で、慣習、ニュアンスといった形で痕跡を残す。日本のアラブ学者も1973年の石油ショックから数年間は、アラブ文化とイスラム教に基づくイスラム文化の違いを認識しながら中東問題を研究してきたが、1979年イランにイスラム革命が起り、イスラム狂信、イスラム活動家が台頭してきた頃から、研究テーマがイスラム教に集中する傾向にあるのがアラブ文化理解の妨げになっている、というタイヤラさんの指摘には大いに耳を傾ける必要がありそうだ。

タイヤラさんは、カルロス・ゴーン前日産社長(現ルノー社長)とはベイルート(レバノンの首都)のフランスリセ(高校)で同期生であったが、

日本でのゴーン人気を、「ゴーン社長は日本人の前で西洋人のように振る舞わなかったから」と分析していた(カルロス・ゴーン日産前社長もレバノン出身でありタイヤラさん同様、パリに留学)。レバノンはアラブ文化圏であり、アラブ・イスラム文化はニュアンスに富むことで知られる。アラビア語を母国語とするタイヤラさんのニュアンスの理解度の深さが、西洋しか知らない西洋人以上に、日本理解を促進したような気がするのである。

因にアラブ音楽もすこぶるニュアンスに満ちている。「日本音楽の再発見」(1976年初版、講談社現代新書)は、作曲家の團伊玖磨と民族音楽学者の小泉文夫の機知に満ちた対談集であるが、アラブ音楽と西洋音楽のニュアンスの違いに触れた箇所があるので、少々長くなるが引用したい。團伊玖磨の発言は「19年前に中近東へ行った時のことですが、スエズ戦争(注2)の影響でバグダッドに2ヶ月半とめられたんです。ちょうど反英思想が強まり民族主義が起りつつあったときだったからかもしれませんが、バグダッドの放送局でおもしろい話をききました。当時ヨーロッパ音楽の放送が一日に1時間あったそうです。ところが投書がきてしようがない。つまらないからやめてくれ。もつとおもしろい音楽を——つまりアラブの音楽をやってくれというのです。イラクの人はラジオが好きで、砂漠のオアシスなどでもラジオをわざわざ道に向けて大きな声で鳴らしているようなところなんです。その人々がシューベルトはつまらん、とくにヨハン・シュトラウスはつまらん、という。その理由がはつきりしているのですね。シュトラウスの音楽はただか音が123、123と続いていく、ベートーヴェンやシューベルトは1234、1234と続いていく。そのリズムの単調さがやりきれないんだ。……不思議な国民もいるものだと思ったのですが、いまはそれがだんだんわかってきました。……16世紀以後のヨーロッパ音楽というものは、パターンがすぐわかっちゃう。そのパターンの連続ということがなぜなのか、なぜこうしないのか。そういうふう

にアラビアの人は受けとる。日本人だと、西洋の音楽を聞いてつまらないと思つたら、それは自分が悪いのだと思つてしまふけども、アラブの人たちは欧米崇拜の眼鏡でものを見ろというような習慣はありませんからね。ずっと昔は同じ言葉で日本でもいい得たのではないかと思うのですが、明治以降はいえなくなつたですね。なにしろ、欧化主義は明治以後の日本の国是だったのですから」

〔日本音楽の再発見〕 p87～88。

一見、日本人とみまがう風貌のタイヤラさん。その上、とても丁寧な日本語を話すから、日本ですれ違つたつて、「あ、ガイジンだ」と思う人は滅多にいないに違いない。2001年9月11日といえば、そう、あの米同時多発テロが起こつた日であるが、タイヤラさんはこの日、パリでもベイルートでもなく、何と東京・霞ヶ関にいた。日本外務省の中東担当官を取材するのが目的であつた。勿論、事前に約束は取り付けていた。が、外務省に到着したタイヤラさんは、中東担当官から目の前で取材をキャンセルされてしまつたのだ。担当官はまるで疫病神がやつてきたように、あわてて約束を反古にした。ドタキャンどころではない。自分がアラブ人だから、とタイヤラさんは思った。フランスで生活しているとしばしば「日本人はユダヤ人嫌いだ」と言う噂があるが本当か? という質問を受ける。タイヤラさんも何度もその質問を受けてきたが、その都度「日本は明治以降、西洋経由でアラブ情報を入手してきた。で、西洋経由のアラブ情報には西洋人のユダヤ人観が反映されている。もし、日本がユダヤ人嫌いだと言う噂が流れるとしたら、そのせいなんだ。日本の日常生活にはアラブ・イスラエル問題が直接影を落としていないから」と日本を弁護してきた。長年、仏国立東洋言語・文明研究所で日本語を学び、遂には政府留学生として大阪外国語大学で日本語を学んだタイヤラさんにしてみれば、何とも悲しい、日本外務省の応対であつた。

そんな、タイヤラさんが日本語を始めたのはま

つたの偶然からだ。レバノン・ベイルート生まれのタイヤラさんは1976年、応用数学を研究するためパリに留学したが、レバノン戦争（1975年～1987年）（注3）は激しくなるばかりでベイルートに住む両親からの仕送りが途絶えがちになつたため、アル・ワタン、アル・アラビアなどパリで発行されているアラビア語の新聞社でアルバイトを始めた。そのうちに記者活動の方が忙しくなり、数学研究の中断を余儀なくされた。それでも研究への熱意はやまず、担当教授に相談したところ、9年間も数学を中断した人が数学者になるのはとても無理。しかし、応用数学を適用出来る学問として比較言語学を奨められた。1988年のことである。当時は日本語が非常に人気があつたので、仏国立東洋言語・文明研究所（通称ラングゾー）の日本語科を選んだ。ラングゾーの日本語科は、日本の哲学者、森有正が教鞭をとつた学校として、また、落第生がすこぶる多い学科として知られるが、タイヤラさんは、森有正の直弟子である教授から日本語を習つた。

1年目で500個、2年目で500個、3年目で1945個、これはラングゾーに日本語科で学ぶべき漢字の数である。なるほど、これなら落第生が多いのも頷ける。だいたい、日本人だつて、年に500個も漢字を覚えられるかどうか怪しい。一番最初の授業に出てきた文章は、「山本さんは日本人です。毎日仕事に行きます」で、既に漢字が9個も出てくる。言葉だけでなく、同時に文学、歴史も学ぶ横割りの授業であつた。福沢諭吉の『文明論之概略』、夏目漱石の『こころ』などが授業教材に使われたが、一番嬉しかったのは『こころ』の仏語訳を先生に誉められた時だという。日本語理解が深化するにつれ、「日本」はタイヤラさんの中で環境の一部になつていった。日本を初めて訪れた時には、懐かしい人と出会つた気分になれた。日本の居酒屋をこよなく愛す。

『ル・ジャポン・エ・デザラブ』は、仏国立東洋言語・文明研究所の修士論文のテーマに明治の政治小説『佳人之奇遇』（かじんのきこく）の著者

東海散士（とうかいさんし）（注4）を選んだことがきっかけで生まれた。タイヤラさんは、日本語を学ぶ過程で、日本の実体がアラブ世界ではあまり知られていないこと、それと同じくらいアラブの実体が日本では知られていないことに気がついた。地図を広げてみれば日本の南方にはインドネシア、マレーシアのイスラム国家が控え、中国にはやはりイスラム圏が控え、ロシアだつて南部はイスラム圏に囲まれていた。そしてイラン以西の広大なアラブ世界。西洋よりアラブ諸国の方が地理的にはよっぽど近いのに心はなんだかすつと遠い。その距離の理由（わけ）は？ 日本とアラブが心理的距離を作る背景となつた日本とアラブの交流史を調べることから始めようとしたタイヤラさんは、日本・アラブ交流史を書いた仏語書など存在しないことを発見する。それなら自分で調査するしかないというわけで、膨大な調査が始まつた。それが『ル・ジャポン・デザラブ』となつて結実した。

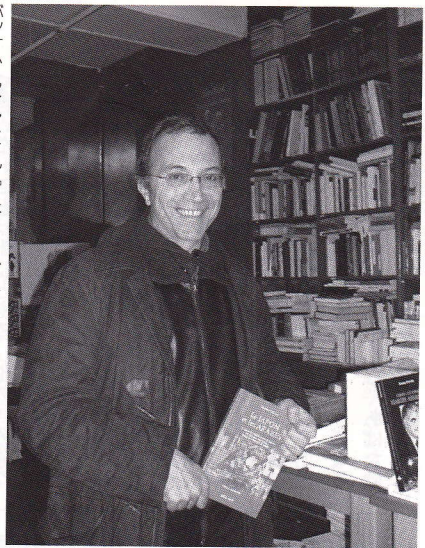
『ル・ジャポン・エ・デザラブ』は、日本とアラブの交流を4つの時期に分けている。①中国経由でアラブ情報を得た時代②17世紀の外国文書翻訳時代③明治時代④石油ショック以降の4期である。中国は古くからシルクロードを通じてアラブ世界との通商を行つてきたが日本は中国との交易からアラブ情報を得ていた。勿論中国語に翻訳されたアラブ情報である。

ポルトガル人、オランダ人など日本を訪れた西洋人は多くの書物を持ち運んだが、その中にはキリスト教関係だけでなく、アラビア語の科学・学術書をラテン語など西洋語に翻訳した書がかなり含まれていた。

明治時代前後は非常に重要である。なぜなら、日本人がはじめて自分の目でアラブ世界がどんなであるかを目撃した時代であるから。といつてもアラブ世界を訪問するためではない。ヨーロッパを視察する途中、当時は船旅であつたため、あちこちの港に泊まつたが、その中に、イエメンのアデン、エジプトのスエズ、ポルトサイド、アレキ

気ままに フローム・ヨーロッパ

ハッサム・タイヤラさん 日本アラブアラブム を手



サンドリアが含まれていたの
ある。スエズ運河開通（186
9年）と日本開国（1868年）
がほぼ同じ時期であったのは奇
遇だ。日本の欧州使節団は、ス
エズ運河のお陰で、紅海を渡る
ことが出来た。その結果、等身
大のアラビア半島を体験したの
である。が、明治政府の欧化主
義はアラブ世界の理解にむしろ
ブレーキをかけた。というのも
当時、エジプトと日本は、世界

列強と不平等条約を結んでいる
ということ、英国に借金があるという点で共通
点があったが、で、そのために日本はエジプトに関
心を向けていたのであるが、エジプトの独立運動
が失敗したこと、ヨーロッパに比べると、アラブ
諸国はいかに貧しく見えたこと、アラブ情報の
殆どをヨーロッパで入手したため、エジプトは一
転、日本にとって反面教師の意味しかもたなくな
ったのである。西欧列強と肩を並べるためには、
西欧の植民地主義のノウハウを学ぶこと、それが
ひいては不平等条約を解消するだろう、と。19
00年の義和団事件で日本は、西洋列強（イギリ
ス、アメリカ、フランス、ドイツ、オーストリア、
イタリア）の側につき、現在のイラクにおけるア
メリカの役割を果たしてしまった。秘密結社であ
る義和団の反乱を鎮めるため、一番兵士を送った
のは日本であったのだ。

日本は西洋列強の植民地にならないで済んだが、
ロシアが日本にとって危険な存在であることを悟
る。ロシアの傘下には中央アジアなど多くのイス
ラム教国があるため、イスラム情報の蒐集は急務
になった。1906年、日本はトルコと手を結ぶ
ため、アラブと非アラブ諸国からイスラム教の権
威を招いて反ロシアの会議を開いたが、アラビア
語を話せる日本人通訳がおらず、すべて英語・フ
ランス語を介して会議が進行した。

日本が直接アラブ諸国と交流する必要性を痛感

し、アラビア語に力をいれ始めたのは1973年
の石油ショックからである。その努力がいま実り
始めているという。イラクに自衛隊を派遣したか
らという理由でアラブ人の日本に対する感情が悪
化することはない、とタイヤラさんは言う。なぜ
なら、アラブ人は反米であつても、アラブ政府は
反米でないから。日本もそれと似たようなものと
アラブ人は解釈しているのだという。

タイヤラさんは、現在の日本に欠けているのは、
一般市民レベルでの交流だという。今まで日本の
援助は金銭的なものに限られてきたため、アラブ
世界では日本の専門家が育たなかった。イギリス、
アメリカ、フランス、中国は既にアラブ諸国に言
語センターを作っているが、日本も日本語を学ぶ
場をアラブ諸国に作るべきだと。

タイヤラさんは2003年に「アラブ日本友好
協会」を作った。会員はフランス、レバノン、バ
レーン、モロッコに住む日本学者、作家、ジャ
ーナリスト38人。目下、ユネスコ（国連教育科学
文化機関）に提出する「文化の多様性に関するリ
ポート」作成中だ。

そのタイヤラさんから日本語でメッセージをも
らったので一字一句直さないで、ここに紹介した
い。

タイヤラさんのメッセージ
日本はアラブ世界から地理的に遠く、歴史的に
も結びつきが浅いのですが、十分な相互理解を建
設し、真の友好・親善関係を築き上げるための鍵
となるのは、何といつてもお互いの言葉だと思い
ます。わたしはかつて読んだ詩を思い出します。
その詩はわたしの友人であるイラクの詩人カヂ
ム・ジハド（注5）が書いた詩です。その詩の中
で、語られているのは、日本の友の話です。その
詩を日本の方々に差し上げたいと思います。

日本の友と音楽の謎（アバス・ベイドウン）
（注6）

旅の途上のベルギーの
宿の隣人は日本人だった。
共にレンブラントに
見入っていた。

前後、彼はつつましく
日本のみやげをさしだした。
硬貨の入った美しい布袋
異郷で知り会う友人に渡すようにと
彼の婚約者が刺繍した。

油絵の画の中では一人の人物が笑みをうかべている。
うたっているかのように。
私は心をうばわれた。

人気のない、広く冷たい展示室に
突然私達にしか聞こえぬ音楽が沸き起った。
秘密めき謎に満ちた音楽
その不思議な旋律は画中の微笑む人物からか
それとも
背後の日本の友の口笛だったのか
今も、解らず。

（注1）ジャック・フレル（1909年11月7日 - 1978年）はベルギー
出身の歌手でフランス・ジャンソン史でも重要な位置を占める。世
界的ヒット曲の代表は「行かないで」。1977年、マルキース島に
移住。最後のアルバムとなった「フレル」には「遥かなるマルキ
ス島」という曲が納められている。
（注2）スエズ戦争は1956年勃発。ナセル・エジプト大統領の
スエズ運河国有化で終結。
（注3）レバノン内戦は1975年11月1980年の12年間続いた。70
年にヨルダンからパレスチナ難民が流入し、1975年キリスト教右
派の民兵がパレスチナゲリラを射殺したことから内戦となり1982
年にはイスラエル軍がレバノン南部を占領。85年に大半が撤退した
が、87年パレスチナ解放機構を討つようシリアが大部隊を投入。
（注4）本名は栗田四郎（1892年11月22日 - 1922年）。元海軍少将。明治の
小説家、政治家。自らの外国体験を元に、米国、欧州、アラブの政
治的動きを背景にした全9巻の大長小説「佳人の奇遇」は188
5年から1897年の13年間にわたって出版された。主人公の東海
散士は留学先の米国で独立運動家のアイルランド女性、革命家のス
ペイン女性、独立運動家の中国人女性と知り合い友情を結ぶ。その
仲間の体験から東海散士は各国世界事情を知っていく。エジプト独
立運動の英雄ウーラウイ、パシヤとの出会いがクライマックス。エ
ジプトはオスマントルコから独立しようとして戦っていたが、ウーラウ
イ、パシヤの革命は、植民地の目撃者として知られた。日本は当時
エジプトの動向に大きな関心を寄せていた。「佳人の奇遇」とは「美
女の偶然の出会い」の意味。
（注5）カヂム・ジハドは1955年に、イラク南部、バグダード
南東約350キロにある古代メソポタミアの都市ウルで生まれた。17歳
から新聞、文学雑誌で詩を始めた。1976年にフランス
に渡り、1985年ソルボンヌ大学のアラビア学博士号取得。国
立東洋言語学研究所の講師となる。漢文集を5つ出版し、イタ
リアの大詩人マリアの「祝福」をアラビア語に無韻詩で翻訳した。
文章評論にも携わる。

（注6）レバノンの詩人